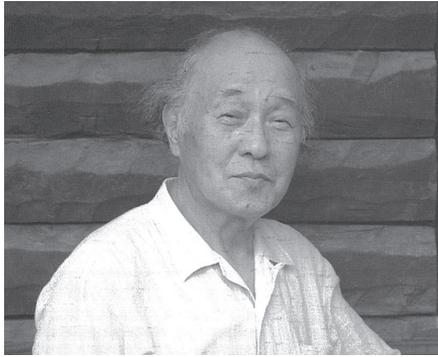


追悼 柳沢 廣 前顧問

碌山美術館の充実と発展に尽くし、
生涯を通して彫刻の勉強を続けら
れた柳沢廣先生の死を悼む

公益財団法人碌山美術館 代表理事 高野 博



柳沢廣氏略歴

昭和八年	七月	二九日生まれ
昭和三一年	三月	信州大学教育学部卒業
三五年	四月	岡谷市立湊中学校教諭
三九年	四月	南安曇郡穂高町立穂高中 学校教諭
四一年	八月	病氣入院中にとどめた私 家版「つくまのなべ」刊行
四四年	四月	松本市立菅野中学校教諭
四八年	四月	信州大学教育学部附属長 野中学校教諭
五三年	四月	松本市立開智小学校教諭
五六年	四月	南安曇郡安曇村立大野川 小学校教諭
五九年	四月	長野県教育センター専門 主事
六二年	七月	塩尻市立広丘小学校教頭
六三年	四月	松本市立菅野中学校長
六四年	三月	塩尻市立塩尻中学校長
六八年	四月	塩尻市立塩尻中学校長で 定年退職（在職二八年間）
七〇年	四月	財団法人碌山美術館長 長就任
七三年	四月	財団法人碌山美術館理事 長就任
七八年	四月	財団法人碌山美術館顧問 就任
八〇年	九月	「柳沢 廣作品集」刊行
八三年	八月	瑞宝双光章叙勲
八五年	三月	公益財団法人碌山美術館 顧問退任
八六年	二月	五日逝去 満九〇歳

二月六日美術館からの電話で柳沢廣先生の訃報が伝えられました。新型コロナウイルスの流行によりお宅を訪ねる事を自粛している間に施設に入所され、お見舞いにも行けないままのご逝去、残念でなりません。もつとお話を聞きたかった。

柳沢廣先生と私との出会いは、先生が美術科の教官として勤められていた信大附属長野中学校での八週間の教育実習を受けたことでした。その前年の昭和四十三年の春には信大教育学部にも大学闘争の波が及び、八週間の過酷な教育実習の改善を要求する運動が始まりました。私の年次は教養部第一期生でもあり、四十四年に教育実習を受けられたのは中学校教育課程美術科三年生十名中で彫塑横田研究室の宮下知恵子さんと田原研究室の私の二名だけでした。その二名で六月から八週間の附属長野中学校での実習に臨みました。美術科の教官もまた柳沢廣先生と新津秀材先生のお二人で、マンツーマンでの濃密な指導を受けたのでした。さすがに教育実習も終盤になるとやや余裕も生まれ、先生方の指導の下ガリ版で「石井鶴三語録」を作りました。後日、教生に余分な活動をさせたと附属中学校内で問題になったと聞こえてきましたが、いま振り返ると教科の指導法の学習だけでなく、鶴三の文章を読み鉄筆で筆耕する作業そのものが、彫塑専攻の二人にとって「彫刻とは何か」をも学ばせてくださったと思うのです。

私と美術館との係わりは、平成十四年に穂高町立穂高北小学校に赴任した折に幹事に任命されたことに始まります。以降十六年に評議員、十九年に理事に任命され、二十五年の公益財団法人への移行後も理事になりました。その後五十嵐館長の病氣退任により、三十年四月に館長を拝命しましたが、教生としてご指導いただいた縁、高家の生涯学習センターでの「彫塑仲間会」で制作を共にさせていただいた縁もあり、先生の碌山美術館長期展望の下の出来事のように思えるのです。

教員として

先生の三十八年間の教員生活の中で特筆すべきは教員二校目で穂高中学校に赴任したことだ。

教育学部の学生時代、松本分校では石井柏亭先生に絵の指導を受けていたのですが、とりわけ彫刻に関心があり碌山生家を訪ねたり、長野の田原幸三先生の勧めで上田彫塑研究会に参加しています。そこで石井鶴三先生の制作を目の当たりにし彫刻に魅了された先生にとって、二年前の昭和三十三年に開館した碌山美術館に隣接する穂高中学校での勤務は天にも昇るような思いであつたらうと思うのです。そこでの柳沢先生の意欲的な授業の様子は館報第四十号の十五頁、急逝した五十嵐前館長の追悼文の柳沢先生の項で生き生きと表現されています。穂高中で美術の指導を受けた生徒の中からは現評議員で彫刻家の酒井良さん、元館長の故五十嵐久雄さん、現館長の幅谷啓子さんが育ち、今も碌山美術館運営の大黒柱となっている姿を見ると、週二時間の美術授業が楽しかった事が想像できます。

その後赴任した附属長野中学校、長野県教育センターでの美術専門主事としての勤務は、美術教師としての実力を高く評価されていた証です。また学校経営の分野でも、最後の赴任校塩尻市立塩尻中学校では校長として学校経営に励まれ、平成五年には東筑摩・塩尻の校長会長・中学校校長会長の重責に加えて長野県美術教育研究会長も務められました。

碌山美術館では

平成六年三月に退職後、すぐに碌山美術館長に迎えられました。平成の初めには三十万人近くもあつた入館者も、安曇野ブームの落ち着きにより館長就任時には二十一万五千人ほどとなり、その後も右肩下がりはありましたが、財政的にはまだまだ潤っていた時期です。また前述の

五十嵐久雄さんが二年前から事務長となり美術館の総務に辣腕を振るいは始めていました。そのため先生の在任中に美術館の施設拡充が一層進みました。平成八年には第二展示棟が建設され、同時にボランティアによるグズベリーハウスの増築工事が行われました。翌年にはトイレ棟の新築、ボランティアでの受付棟建設が行われています。

実務面で任せられる事務長の存在は、館長が美術館の活動を大幅に広げることを可能にしました。平成八年にはグズベリーハウスにあった足踏みオルガンをポケットマネーで修理され、碌山忌で西山紀子先生のオルガンによる演奏会を催し、現在の碌山忌の雛型となっています。また美術教師の経験を活かして作ったテラコッタの鳩笛は、ショップで販売する美術館らしい自前の商品でした。

作品鑑賞・解説だけの美術館から、立体制作の楽しさを体験する教育普及活動も柳沢先生が始めました。彫塑制作の裾野を広げる美術実技講座「彫塑に親しもう」は、柳沢先生が平成九年の秋に始めました。社会人でも容易に参加できるよう夜間二時間、美術館駐車場雑庫での制作から始まった講座は、やがて研成ホールに会場を移し、現在は新型コロナウイルスの蔓延から休止してはいますが、研成ホールの企画講習会として続いています。また小中学校の夏休みに行われている「粘土に親しむ」は、子供から大人までを対象に平成九年から穂高東中学校の美術室を借りて始まり、現在では美術館の子供実技講座として研成ホールで続けられています。

柳沢先生は平成十三年三月で館長を退任後、十八年の三月まで財団法人の理事長としての重責を担われました。その後は顧問となりましたが、同年にテレビドラマ「碌山の恋」が制作され、その撮影協力として先生が碌山作品の《女》を、細萱美穂人さんが《文覚》を模作して撮影現場に提供されました。碌山の制作を追体験できるこの機会は、模作に当

たったお二人にとって学ぶことの多い体験だったろうと思います。また、平成十九年の石井鶴三生誕百二十年記念『石井鶴三と信州―立体感動をつたえる力』展では記念講演で「巨人 石井鶴三の信州へのこだわりと追及」と題する講演を行われました。講演は館報二十八号に掲載されていますが、石井鶴三研究者の講演のような客観的・分析的なものではなく、石井鶴三の教えを直接受け、その教えを「自身の彫刻観の中に吸収・消化し制作を続けている彫刻家ならではの講演だ」と思えるものでした。

碌山美術館の規定では、顧問は無任期でお勤めいただく事になっていましたが、令和四年に柳沢・山田両顧問から職責を果たせないため退任したいとお申し出があり、お二人の意向を尊重して翌年顧問の退任規定を設け、退任していただきました。

彫刻家として

柳沢先生の生涯を通して貫いていたものは彫刻への探求心だったと思います。学生時代の碌山生家の碌山館への訪問から始まり、大学三年生での上田彫塑研究会への参加が先生の造形活動の方向を決定づけたのでしょう。鶴三の彫刻論に魅了されたため、ちょっと見には石井鶴三の真似をしているようにも見られがちですが、鶴三の彫刻観・立体観と先生の彫刻観・立体観が見事なまでに共感していたのだらうと思います。昭和三十年の《青年の首》は碌山のような滑らかなモデリングとロマンを感じられる秀作ですが、それ以降の表現は一層厳しくなっています。碌山の塑像が天平彫刻に通じるとしたら、柳沢先生の彫塑は飛鳥の仏像のようにプリミティブで象徴的であり、流動さや柔らかさを排した剛直な塊を感じさせます。

教職にある者にとって、人物を主なモチーフとする彫塑の制作は、な

かなか制作の機会が取れないのですが、上田彫塑研究会での勉強と合わせての木彫の勉強がより一層個性を引き出していきます。平成二年に豊科町高家に信濃教育会生涯学習センターが開設されて以降は、センターの生涯学習塾「彫塑仲間会」を拠点に制作を重ねられました。私もしばらくして彫塑仲間会に入っていたが、制作を共にすることが出れましたが、アトリエでの先生は寡黙で常に自分とモデルとが対峙するような厳しさを持っていました。誰よりもモデルを観察しスケッチで構想を練る。モデル全体を貫く動勢を捉え心棒を立てる。モデルから受け取った生命感を確かな塊で表していく。モデルに似せるのでもなく、美しく表現するのでもない。柳沢廣という彫刻家の感性がとらえたかたちを表現していたのだらうと思うのです。

晩年の先生は、体力的な問題もあったのか石膏直付けで制作されるようになりました。心棒の針金にわずかな石膏で肉付けされた像は、一見するとジャコメッティ風に見えるのですが、柳沢先生の彫刻のエッセンスを成すかたちであつたらうと思うのです。

告別式の折、喪主の譲さんから先生の奥様さつきさんの詩の抜き刷りを頂きました。詩人である奥様だからこそ感受できた彫刻家の詩を紹介して、追悼の文とします。

彫 刻

(昭和三十六年四月刊行 詩誌「かおす」二六号より)

山口 さつき

総身の疼痛をこらえて
傷だらけの顔をあなたに向ける

あなたは鑿を持つ
その ぴたりときまった角度
わたしは直立不動になる

打ち込む

はっしと受けとめる

打ち込む

ざっくりと受けとめる

鋭くくい込んだ刃の熱気で
にわか燃えだす肉身

それを えぐり

ぐいぐいとえぐり

肩から胸へ

腰から足へ

生々しい傷をつけていくあなた

挑戦か

呪いか

そのたくましい腕が

ふと とまる

血走った眼が

ためらう

わたしは

あなたの孤独を彫りたまえ
あなたの記憶を刻みたまえ
いま
息をひそめて凝視^{みつ}め合っている証を
切先鋭く
痕したまえ

あなたが

やおら ふりあげて

突き刺した一瞬

点がきまり

つづけて突き刺し

えぐりとり

えぐりとり

だんだんと夾雑物を落し

傷痕の深々とした翳に

無にちかづいたわたしが呼吸する

あなたが

刻み呆けて

茫然と立つとき

木屑に埋もれたわたしは

あなたの秘密そのものになる。